

明治9年兵庫県淡路島生、32年京大法学部卒、判検事弁護士試験合格、33年高等文官試験合格、兵庫県立洲本中学校長、35年大分県視学官、石川、熊本、岩手、各県事務官、45年警保局警務課長 大正5年三重県知事・内務省警保局長、7年貴族院議員 8年後藤新平の下に東京市助役となる。後藤市政は、巷間に「8億円計画」といわれた巨額な東京発展構想を公にしたが、その首席助役として策定の中心的役割を果たす。後藤市長が2年余で辞職後、あとを継いで東京市長となる。後藤市政の構想に加えて、東京港の開港・東京市域の拡張、社会福祉の確立という方針を示し、市域の拡張は第2次永田治政で、東京開港は8年後の昭和15年にいざれも実現している。これより先、関東大震災後戒厳令下における東京の復興、その構想や後藤・永田とつづいた治政が今日の東京の計画に大きな跡を残したこととは銘記すべきである。

永田は、文人——あえて文化人とはいわない——とし



て、その人間性が、東京の焼土の中をさよった市民にどれだけ大きな力になったか判らない。俳人として、随所隨時に彼の思いはこの短い言葉に現れている。“梨噛り乍ら生死の巷行く”，“バラックに人生きて居る野分かな”等は、この時代、学窓にあった私としては忘れる出来事ではない。永田が2期目の市長となったとき私はしばらく市長の側近にいた。

市長は俳句のみでない。彼の挨拶・演説はそのまま活字や本になることで知られていた。しかし、あの“即狂”ともいえる美辞麗句は、慎重な考え方からの発想だったのである。一面では側近の書いたものをおろそかにしないという“配慮”が、身近にいて始めて判った。

永田は、東京の災害を、多年の中央行政や国際的な関係を基礎として、“転禍為福”という言葉が当時の東京市民の口からきかれるようになったほど努力をつづけ、昭和5年の「帝都復興祭」が行われるまでに、被災者の慰靈のための記念堂を本所に、高野山に“記念碑”を建立した。しかし人事をめぐって市会と対立し、復興式典後2カ月で退職。その後は拓務・鉄道大臣を経て東京市政調査会の会長となり、昭和18年9月17日東京市小石川区で没する。